

◎エピローグ——路上・広場の自由を取り戻すために

2012年7月16日、東京・代々木公園で開催された「さよなら原発10万人集会」には、全国から17万（主催者発表）もの人が参加した。この盛り上がり続ける直接行動は、史上最悪の原発事故により引き起こされた甚大な被害・被災者を放置し、収束の目途も立たないままに原発再稼動を強行し、原発輸出、核武装に突き進む政府、そして電力会社、原子力ムラ等への怒りの表れだ。

集会開始から30分後には原宿、渋谷、新宿の3つのコースに分かれてデモ隊が出発したが、集会が終わるころにも、まだ会場はたくさんの人であふれていた。

原宿コースでは、会場を出てしばらくは道路いっぱいにはデモ隊が広がったが、原宿駅に出る山手線をまたぐ橋の手前で、警察によって1車線に押し込め、デモ隊を細かく分断するデモ規制が行われた。隊列の間隔をあけるために、警察が進行を止める。後ろにはどんどん会場からのデモ隊がやってくる。そのため、会場からの道路はものすごい数の人、さまざまな旗、のぼりで埋めつくされた。主催者の宣伝カードだろうか、マイクで警察の車線規制に抗議をしていた。表参道に出たからは、部分的に2車線が解放されたこともあり、一部では道幅いっぱいには広がるフランスデモも行われた。人々の熱気に圧倒されながら、デモ隊が警察の規制を突破して表参道を埋め尽くし、繰り出して

いくことを想像する。道路を私たちが取り戻し、自由に、解放感あふれるデモをする。交通も物流も止める……そうすれば、何かが変わるに違いない。

本書は、2011年の秋、野田政権が高揚する反／脱原発運動を無視したままに、原発推進、原発輸出方針を打ち出し、一方で何も解決しないままの福島第一原発事故を「収束宣言」するという暴挙に出る直前から企画していた（*1）。

2011年3・11以降拡がった、反／脱原発デモで20人を超える逮捕者を出すという事態が起きていた。また、9月23日の「差別・排外主義NO！ 9・23行動」では、三一書房から『ボクが東電前に立ったわけ』を出版した著者、園良太さんが逮捕された。いずれも「警察の襲撃」というべき、不当逮捕だった。これらは、9月23日の逮捕も含め、全国に拡大する反／脱原発デモを押し込め込むための「みせしめ」であり、多くの人々の声を無視して原発を推進し、事故と放射能被害の責任追及を逃れようとする国家の、焦りに満ちた「巻き返し」策動だ。またこれらの逮捕が、3・11以降、デモに参加した人たちに「デモは怖い」と思わせる効果を上げていることも事実だ。

不当逮捕は、デモ主催者を疲弊させる。「素人の乱」呼びかけの「原発いらないデモ!!!!」も12人の不当逮捕者が出た9月11日以降、しばらく企画されなくなった。

不当逮捕者が出ないに越したことはない。警察との衝突もないうに越したことはない。そのための、工夫と準備をすることは大切だ。だが「逮捕されるほうが悪い」「逮捕者が出るようなデモを行う

の「いけない」というような考えに与^{くみ}することはできない。反／脱原発運動と原発推進・再稼働を目指す国家とのせめぎあいが続くなかで、「弾圧」問題について正面から見据える必要性が求められてきた。この問題を考えるには、「歴史を振り返り、事実を知り、根本問題を見つめること」が大事（園良太『ボクが東電前に立ったわけ』三一書房）だ。

今、いったい何が起こっているのか、国家権力の狙いは何か、弾圧とどのよつに闘えばよいのか。そもそもデモの自由、路上・広場の自由とは何か。さらには、デモと民主主義の問題等について、さまざまな角度から論じる本を私たちはつくることにした。同時に、ニューヨーク、パリ、釜山での直接行動を報告することで、私たちの「反／脱原発」のための直接行動により広く本質的な視点を提示することを企図した。

2012年5月5日、日本の原発はすべて止まった。だが、その直後の6月16日、野田政権が大飯原発の再稼働を決定。日本中で抗議行動が展開されてきた。3月から「首都圏反原発連合」(以下、「反原連」)の呼びかけで毎週金曜日に首相官邸前での抗議行動も開始された。大飯原発再稼働を目前にした6月29日には、主催者発表で17万ともいわれる人々が結集し、人々の波は官邸前交差点を埋めた。7月1日には、「素人の乱」呼びかけの「原発やめろ野田やめろデモ!!!!」が新宿で行われた。また、6月30日から7月1日にかけて、大飯原発現地では、原発ゲート前を、再稼働に抗議する市民が数台の車両とチェーンで(身体を鎖でつないで)封鎖した。まさに命かけの「再稼働反対」

のコールとドラムが、一昼夜途切れることなく鳴り響いた。7月1日、機動隊が介入し、激しい押し合いが始まる。夕方になって座り込みの人々に対し、暴力的な強制排除が行われた。

再稼働は実行されたが、断固として再稼働を阻止する意思表示の直接行動が展開された。そしてその様子は、インターネットメディアを通じてライブで中継され、多くの人々によって共有された。7月29日の「脱原発国会大包围」(反原連主催)においても、徹底した警察の規制、警備によって細長く分散された人々は、ついに国会正門前交差点の規制線からあふれ出し、国会前を埋め尽くした。その様子をヘリから空撮・中継していたアワープラネットTVの白石草さんは、「歴史的な場面に遭遇している。美しい」と実況した。

人々は、政府の理不尽な再稼働にも屈することなく、逆に強い怒りをもって、各地の街頭で抗議の声をあげ続けている。日常的に「デモをする社会」になってきた。

しかし、運動が拡大するなかで多様な人々が集まることから、さまざまな意見、論争も起き、対立も生まれやすくなっている。先の首相官邸前行動をめぐるでも、いくつかの矛盾や分岐が露^{あらわ}わになった。そのひとつに、当局・警察によるデモ規制とのスタンス(権力対応)の問題、反原発集会やデモへの「日の丸」の持ち込み、差別排外主義の問題(国民運動)、再稼働反対の「One issue」を強調し、福島の避難の権利、被曝労働者の問題、がれき広域処理問題などを取り上げない・取り上げることを認めないことなども指摘されている(詳しくは、園良太さんのブログ

2012年7月、8月の記事を参照)。

これらの問題を議論し、分断されることなく対立を乗り越えていくこと。それは日本の反／脱原発運動が、世界を変えていくための本質的な運動となりえるのか否かが問われる最重要課題である。

アメリカのオキュパイ運動のなかでも、「オキュパイ(占拠)」という運動の名称に対して、ネイティブ・アメリカンから「ウォール街での『運動』は先住民から奪った土地で行われている、という歴史が明確に示されることを望む」という批判があがった(76ページ参照)。これを受けて、アンジェラ・デイビス(黒人解放運動・フェミニストの活動家・思想家)は、スクエア公園でのスピーチで、「私たちはどのようにして互いに統一されるのだろうか」と問いかけ、オードリー・ロード(ブラック・フェミニスト)の言葉を紹介した(*2)。

「人々の間の多様な違いは、ただ単に許容されるべきものではない。それは、必然的な対立の間から、私たちの創造性が弁証法のように輝きあらわれることができる宝庫として理解される」。

本書が、「複雑で解放的なひとつの共同体」を生み出すための議論を促す一助になることを願う。そして何よりも、暴力支配のない、平等で自由な社会を求めるすべての人々の願いが実現することを。

2012年7月

三一書房編集部

*1 当初は6月ごろ発行予定だったが、執筆者の一人園良太さんが2012年2月、不当逮捕・起訴され、長期勾留を強いられたことから、発行が遅れた。そのため、原稿は、5月末時点のものになっていることをお断りする。

*2 ユーチューブ「アンジェラ・デイビス、ワシントンスクエア公園でのスピーチ」(2011年10月30日)を参考にした。